

2-22. 剣術修行論に関する一考察

— 山鹿高厚「たより草」を中心として —

長尾 進（明治大学）

I はじめに

本研究では、国立史料館蔵・山鹿高厚著『たより草』（文政11年・1828）の分析を中心に、近世後期の形剣術から試合剣術への移行期における剣術修行論について考察を加えた。『たより草』については、笹森順造著『一刀流極意』に、「笹森家所蔵伝授録」の一つとして書名（『多与梨草』）のみが紹介されているが、その全文は管見するかぎり活字化されていない。そこで本研究では、国立史料館蔵津軽家文書本を底本として翻刻をし、分析を行った。

著者の山鹿高厚は、山鹿素行の四代である父山鹿高美に一刀流を学び、小野忠孝より極意を受け、津軽藩の一刀流指南役を務めた。父山鹿高美は、一刀流における防具改良・着用を推進した中西忠蔵との間で、組太刀やしない打についての意見交換をしたことが、笹森前掲書に紹介されている。

II 『たより草』の内容と意義

高厚は『たより草』を著した同年に、『むかし噺』（笹森前掲書）を著しているが、そのなかで「しない打稽古の事は畢竟組太刀の助けとせん為なり」と述べ、しない打の稽古はあくまで形稽古の補助的なものであるという見解を示している。また小野忠孝が、「当流しない打の儀、起請文之通容易難相成事に候、一中略一、組合者薄くおのづから形を崩候様に見請候に付、筋違に不相成様可被心掛候、但しない打の儀従前之治定通、十二ヶ条以上伝授之衆者格別之事、初心之衆者無用可被成候」（笹森前掲書）というように、小野派一刀流においては、ある程度形稽古の段階をふんだ者にしか、しない打を許可していなかった。

しかしながら高厚は『たより草』のなかで、形稽古のデメリットの部分についても随所で触れている。「剣術切組を教るに、其形ちを直し、手足の無理成事を直し、扱又勝所をいろいろに直して夫にてよしと教る。一中略一、相手かわりても矢張その心持を以て遣ふ。これ心得違ひの本なり」「人に好まれ杯せし時、能く遣ひ見せん杯の心持有人、儘有之ものなり。勝負において左様の自由成事出来る物にあらず」「実意の勝負に至る時は、皆敵のかたに遠近遅速有事にして、我が覚えたる曲尺合にては実意にあたらず」などである。

文政期は、関東においては試合剣術を中心とした新流が興隆し、西日本でも広範囲において他流試合が活発化した時期である。津軽藩においても参勤交代の折などにこれらの影響を受けたことは十分に考えられ、「組合者薄くおのづから形を崩候様に見請候」と小野忠孝が記すように、しない打（試合剣術）の普及によって流派間における修行形態の相違の意義が希薄になり、形稽古についてもその得失が問われてきた時代の、修行論の一つの典型とみてとれる。